

森暢平著

『近代皇室の社会史』

——側室・育児・恋愛——

沢山 美果子

大学で日本史学を専攻したのち宮内庁担当の新聞記者となった著者が抱いたのは「メディアはなぜ皇室の私的生活を取材するのか」という疑問であった。その疑問への答えを出す過程で書かれた学位請求論文（皇室の「近代家族」化と日本社会）がもととなった本書は、「はしがき」によれば「皇室に近代家族を見ようとする新たな試み」である。

その課題は、本書のサブタイトルに「側室・育児・恋愛」とあるように、「側室」を廃した一夫一婦制、「御手許」養育という「育児」、「恋愛」に基づく婚姻へとという皇室の歴史的变化は、日本の家族の近代家族化に合わせ皇室が自らを変動させた「皇室の近代家族化」の過程であることの論証にある。以下、まず本書の概要を整理し、次に論評をくわえることとしたい。

一 本書の概要

本書全体の構成は次の通りである。

序章 なぜ、皇室が近代家族であることを問うのか

I部 睦仁・美子、嘉仁・節子の時代——明治中期から大正前期

第一章 明治期における皇太子嘉仁・節子夫妻と近代家族

第二章 永世皇族制と近代家族化のなかの皇族庶子問題

第三章 大正期皇室における一夫一婦制の確立

II部 裕仁・良子の時代——大正後期から昭和戦前期

第一章 大衆社会化のなかの皇太子妃良子

第二章 近代皇室における「乳人」の選定過程と変容

第三章 皇子養育をめぐるポリテクス

III部 明仁・美智子の時代——昭和戦後期

第一章 敗戦直後の内親王の結婚——「恋愛」への注目——

第二章 美智子妃「恋愛神話」の創出

第三章 ミッチー・ブーム、その後——「大衆天皇制論」の再

検討

終章 「近代家族」と皇室

序章では、先行研究の検討を通して、本書の課題が導き出される。著者は、「天皇・皇族の婚姻・生殖・子育て」を正面から扱ってこなかった近代天皇制研究に対し、皇室の家族や皇后の役割に注目した点で皇室の家族をめぐる研究を評価する。だが、その枠組みは、皇后・皇太子妃に古い「家」に生きる不幸や苦悩を見るなど、戦前の「家」と戦後の家族の民主化の対比から抜け出せていないとする。

それに対し著者が注目するのは、戦前日本の、特に新中間層家族に近代家族を見出した近代家族論や、近代家族の歴史の実態を、近代家族の葛藤、恋愛と結婚といった側面から探る歴史研究、そ

してペアとしての天皇・皇后や子ども中心の親密な団欒の姿という表象の意味を探る表象研究、ジェンダーの視点から皇室像の規範性を探る研究である。

さらに、戦後に美智子妃が大衆的熱狂で迎えられた背景を大衆社会状況のなかに探る「大衆天皇制論」や、戦前天皇制においても、大衆天皇的な状況が出現していたことを指摘した論を歴史的事実に基づいて実証する必要性を指摘する。

以上の先行研究の検討から著者は、「皇室研究と近代家族論の成果を接合」させ、「皇室と日本社会の家族のあり方の相互関係」を明らかにするという課題を導きます。本書の特徴は著者によれば、「明治中期から高度経済成長期まで、皇室の変動を長い射程のなかでみる」点、そして「皇室研究を『皇室の歴史』に閉じることなく、家族史・ジェンダー史・メディア史・法制史・大衆社会論にまで目を向けた」(一一頁)点にある。

用いる史料は、皇室内部を知る人間の日記をはじめ、女官への聞き取り調査、乳人選定の記録など今まで用いられてこなかった史料、新聞、雑誌記事、公民館報、テレビ画像といったマスメディアに関する情報など多岐にわたる。また、分析にあたり著者が「皇室における近代家族化」の具体的な指標として重視するのは、「一夫一婦」と「子どもの養育」であり、近代皇室の近代家族への接近は、近代皇室が、この二つの指標を備えるに至る過程として描かれる。Ⅰ部では、明治・大正期の二代の皇室が一夫一婦に転じる過程が、Ⅱ部では、昭和戦前期の裕仁家族が近代化を試みつつも、戦時下に乳人制度の継続、お手許養育の中断に至る屈折が、Ⅲ部では、明仁の姉たちと明仁・美智子の結婚とそこでの

「恋愛」重視の様を描く。

詳しく見ていこう。なお、ここでは本文中の文章に依拠する形で要約を試みる。Ⅰ部第一章では、明治末期の嘉仁・節子の新夫婦は、日清・日露の戦間期に近代家族の担い手である新中間層が登場し「近代家族が入びとの目指すべき理想となっていく」(二五頁)時代状況に対応し「近代家族に接近しようとしていた」(四〇頁)とする。

第二章では、「宮家の近代家族化方針」(七〇頁)のもと、一九〇〇年(明治三三)段階で側室を持つ皇族はいなくなり、一九一〇年には庶子を否認する条文を含む皇室親族令が制定されるが、その大きな理由は、明治期皇室が「近代家族化の波のなかにいたことが大きい」(七〇頁)とする。第三章では、大正期皇室の嘉仁・節子は、「近代家族を求める社会のなかで近代的夫婦として振舞った」(二〇二頁)と一夫一婦制の確立を指摘する。また、近代家族を求める時代、華族の子女の多くが高等女学校で学ぶようになり、側室の供給基盤であった一〇代前半から宮中入りする女官制度は制度疲労を起こしたとする。

Ⅱ部第一章では、大衆(消費)社会の出現、マスメディアの急速な発達とともに現れた久邇宮良子／皇太子妃良子は、皇族に「平民」的な姿」(一一頁)を見ようとする人びとの期待に合致する女性皇族であったことを論じる。第二章では、大正デモクラシーの時代に登場した皇太子裕仁・良子は、女官を通勤制にすることで家族のプライバシーを確保し、子どもたちを手許で育てるなどの近代化志向を持っていたにも拘らず、なぜ乳人制度の継続、拡大がなされたのか、乳人の選考過程を中心に論じ、その理

由は、「近代乳人」の制度が、「近代家族としての」「ライフスタイルが一般化する大正後期に、国民と皇室を結ぶ新たな回路として構築された装置」（二七四頁）であった点にあるとする。第三章では、「御手許養育」の実態に焦点をあて、良子自らの授乳が、当時の新聞で「一般女性たちが模範とすべき母性の発露」（一八五頁）として強調されたことを指摘する。しかし「近代家族規範が後退し、むしろ家族成員は国家に貢献すべき」（二〇五頁）とされる時代状況のなかで、皇太子明仁については三才からの別居養育がなされたが、別居後の教育内容にまで目を向けるなら、「御手許」養育の終了という「断絶」のみに注目（二〇五頁）するのは誤りであるという。

Ⅲ部第一章では、占領期の二人の内親王の結婚と「恋愛」に焦点をあてる。二人の内親王の結婚は、国家社会や家のための結婚ではなく自分たちの幸福のための結婚へという価値の転換の進行と一致したため人々に歓迎されたが、「恋愛」と結婚を結び付ける恋愛結婚イデオロギーや「愛」を組み込んだ見合い結婚の奨励は、戦前期から連続した傾向でもあったとする。第二章では、明仁と美智子の「恋愛神話」誕生の経緯を、宮内庁内部の史料とマスメディアの動きから追う。「恋愛」の強調は、「マスメディアとそれを受け止める人びとがラブストーリーを歓迎したため」（二七六頁）であり、「当時の人びとの欲望の反映であった」（二七七頁）。第三章では、「幸せな家庭」、つまり近代家族像が、大衆の欲望の的（二八七頁）となるなかで、皇室の正統性の基盤が「皇祖皇宗」ではなく「大衆同意」に求められる「大衆天皇制」の様相を、美智子妃報道を手がかりに論じる。しかし、電化生活

の普及などにより、人びとにとって「幸せな家庭」が憧れの対象ではなくなるとともに、明仁・美智子夫妻の「近代家族イメージは、急速に陳腐化」（三二四頁）したとする。

終章では、「皇室の近代家族化の様相を歴史学的に実証」（三二三頁）するなかで何が明らかになったかが示される。まず、「夫婦関係」について。新聞雑誌は、嘉仁・節子の結婚を「一夫一婦の範」と書き立て、裕仁・良子の時には「新婚カップルの仲睦まじさ報道」が、明仁・美智子の結婚では「恋愛」報道が全面化した」が、それは、皇室が社会の変化を受けて自らの結婚のあり方を変化させたがためとする。次に「子どもの養育」について。

嘉仁・節子の代になされた親子の愛情が深まるための配慮は、新中間層の子どもを家庭の中心に置く考え方の広まりと連動し、裕仁・良子の代には、養育への関与はさらに拡大するなど、「近代家族」への志向という点で、戦前と戦後は連続する側面が強いとする。

しかし、著者は、「一般社会の近代家族化同様、皇室の近代家族化も直線的・単線的な発展という見方では回収できない複雑さ」（三一九頁）があり、「近代家族規範の複数性が皇室家族の社会史である」（三二六頁）と述べる。「近代家族規範の複数性」とは、①国民国家の下部システムとしての近代家族と、家内領域での団欒の場としての近代家族の相剋、②女性を良妻賢母に封じ込めるという近代家族のあり方と、近代家族のなかで高学歴化する女性の主体との相剋、③生まれてくる子ども健康（身体的優位性）を重視し、感染症・遺伝病のない皇太子妃を選ぶ、つまり優生思想という近代的な思考法と、皇室の存立基盤を人々の支持に

置く近代皇室のあり方の相剋、この三つを意味するという。

では、皇室家族が「なぜ近代家族化したか」。それは「大衆社会化のなかで、皇室の存立が伝統よりも人びとの支持という正当性が重視された結果で」、「皇室は人びとの模範であるために、逆に入びとを模範として、その家族システム（皇室のあり方）を変化させていった」（三三八頁）からだ。そう著者は結論づける。

「皇室の近代家族化とは、つまりは天皇家の「平民」化であり、人びととの家族の価値観の共有化」（三三四頁）であったが、その際に大きな役割を果たしたのが「大衆的メディア」であった。「見られる」ことが皇室を「平民」化し、家族に関して人々と価値観の共有が起きたことが、「皇室の近代家族化の最大の理由」だというのである。しかもその動きは、従来考えられていたよりずっと早く明治中期から始まり、高度経済成長期まで連続していた（三三五頁）とする。

二 論 評

評者は、皇室や天皇制については門外漢であるため、ここでは、とくに「皇室の近代家族化」について抱いた疑問を述べ、評者としての責を塞ぎたい。

以上の要約からわかるように、本書の特徴は、従来の近代天皇制研究はもちろん、皇室家族の研究にあっても近代家族への視点がないことへの疑問から、表象研究、ジェンダー研究、近代家族史研究、大衆天皇制論も視野に入れ、皇室の婚姻・子育ての歴史的变化を、近代家族への人びとの期待と関わらせ、明治中期から高度成長期までの長い時間軸のなかで探ることで「近代皇室の社

会史」を描くという大きな構えで取り組まれている点にある。

そのため、性格の異なる多くの史料や著者が古書店で収集した絵葉書などの視覚に訴える史料も多く用いられ、旺盛な史料収集の跡がうかがえる。なかでも著者は、マスメディアに関わる史料を多用するが、それは皇室が近代家族化するうえで、マスメディアが、人々の「希望を社会に頒布する媒体」（三三三頁）だったことに求められる。とくに戦後については、女性週刊誌も含めた雑誌記事やテレビ画像も含めメディア史料が多用され、美智子妃内定までの記述は記者体験を持つ著者ならではの筆致で新聞ルポを読む趣がある。

では、著者が課題として掲げた「皇室研究と近代家族論の成果の接合」という試みが成功しているか、と言えば、疑問とせざるを得ない。むしろ本書の主題は、「マスメディアから見た近代皇室の歴史の変容」ではないかという違和感を持たざるを得なかった。その理由の一つは、皇室の近代家族化の原因は、人びとの「近代家族化」にあるとされるが、「近代家族化」は説明概念にとどまり、近代家族化の歴史的内実が明確な像を結ばないことに加え、近代家族化の根拠の多くがマスメディアに求められ、人びとの意識が新聞報道で代表されている点にある。その傾向は、とくに戦後の「明仁・美智子の時代」に顕著である。たとえば、「ミッチー・ブーム、その後」では、高度成長期に「明仁・美智子夫婦」の「近代家族イメージは、急速に陳腐化する」というときの根拠の多くは、注からも見て取れるように全国紙と週刊誌に求められる。しかし、全国紙と週刊誌を用いるにあたっては、それらをもとに、どこまで皇室の意向や人々の意識を探ることがで

きるのか、その有効性と限界に注意が払われるべきだろう。宮内庁担当記者であった時代「皇室の家族の問題」など「極めてプライベートに関わる問題」への取材に「気が滅入ることが多かった」（あとがき）という著者であればなおのこと、マスメディア資料を歴史の史料として用いるにあたっては意識的な史料批判がなされるべきではなかったか。

全国紙や週刊誌から、どれだけ実態に迫れるかを巡っては、原武史の指摘がある。ミッチー・ブームの終焉をめぐって原は、「確かに全国紙や週刊誌などでは、皇太子夫妻に関する報道は小さくなる傾向」にあったが、「それらを見ているだけでは地方の実態を把握することができない」とする。地方紙に記された夫妻を出迎えた人の数や、美智子妃が見える側に圧倒的に多かった人垣、日々写真入りで紹介される美智子妃の目まぐるしく変わる服装、さらに「美しい美智子妃を見ることができて最高の気分」といった固有名詞で記された一人ひとりの女性たちが発した言葉。それらをもとに原は、ミッチー・ブームは、東京から地方へと波及し九四年段階においても続いていたと結論づけている^①。

理由の二つ目は、近代皇室は、社会の近代家族への期待と価値観を共有し、近代家族化したとあるように、皇室と社会との関係が「相互関係」（二三頁）ではなく一方向的に描かれている点にある。著者は序章で、「近代家族は、国家と家族の間で緊張をはらみ、家族を近代化することの相互利益を共有しながら複雑に展開していく」のであり、「近代家族化＝女性の国民化、という単純な図式だけでは回収できない歴史の重層性」があるがゆえに、「歴史学による緻密な実証」が必要（七頁）なだと述べている。

そして確かに、実証の過程では、さまざまな分析を繰り返してはいるものの、人びとの支持を得るために、皇室は人びとを模範に近代家族化したとの結論からは、皇室と近代家族との単線的かつ一方向的な関係しか見えてこない。

かつて多木浩二は『天皇の肖像』で、民衆の視線のなかで国家の側は新しい権力空間を切り開く必要に迫られたというせめぎ合う関係や、その媒体である錦絵から写真への変化にも注目して天皇の肖像の形成過程を描き出し、見る、見られる関係は一方向的ではないことを示した^②。しかし本書では、人びとと皇室の双方向的なせめぎ合う関係や、人びとの生きる場である家族に天皇制や国家が介入する側面が捨象されてしまっている印象を受ける。

なぜ、そうなるのだろうか。著者は、「近代家族の相剋」の一つとして「国民国家の下部システムとしての近代家族と、家内領域での団欒の場としての近代家族の相剋」（三二六頁）をあげる。しかし、ここで重要なことは、近代家族の外側の公的世界と私的世界とみなされてきた家族の内部を、公／私の相剋や二項対立として示すにとどまらず、公／私の線引きのゆらぎやその歴史性を問うことであり、本書の課題からすれば、そのことが皇室内部の世界を読み解く新たな領域を切り開くことになるのではないか。

評者は、近代家族の生活世界の内実を、そこに生きた一人ひとりの女と男の側から明らかにしようとして試みたことがある。近代家族の形成を理想とした一組の夫婦が、どのように妻、母役割、夫・父役割を内面化していくのか、女と男双方の史料を用い、合わせ鏡のように描き出そうとした^③。その書評で藤野裕子は、そこには、近代家族の規範を理想とし、また「逆手にとって社会進出

と自己実現の途を切り開きながら、しかし、それゆえによりいつそう規範に絡め取られ閉塞していく」姿が描かれていると評した。^④それは近代家族規範にもとづく「家庭」に生きた女と男の規範と現実、その矛盾を孕んだ関係を描くことが、近代家族の内幕を描くことになるとの指摘であり、「相剋」が生まれる動的な歴史的過程の追究を課題として求めるものでもある。

また本書が、近代家族の具体的な指標とするのは、「一夫一婦制」と「子どもの養育」であるが、両者の関係も実は矛盾に満ちている。この一組の夫婦の記録からは、夫は自らを慰安する妻役割を求めるが、妻は自己実現の代償としても母役割にのめり込むという、男と女の抱えた葛藤と矛盾、ズレ、そして男と女それぞれに、父役割と夫役割、妻役割と母役割に引き裂かれる矛盾が見えてきた。「近代家族の相剋」を問題とするなら、近代家族の内幕や相剋が生まれてくる歴史的過程に留意しつつ、社会の近代家族化と皇室の近代化との矛盾と葛藤を孕んだ動的な関係が検討されねばならないだろう。

また、皇室と近代家族論の接合という本書の課題からすれば、マスメディアの質的変化にも留意しながら、近代日本において、「天皇一家」が、近代家族的な「夫婦」や「家族」「親子」のモデルとして形成されていった意味を、「家族イメーজ」登場の空間やその歴史性に着目して分析した長志珠絵、そして近代日本の皇后・皇太子妃の妊娠・出産を「皇后の授乳」言説や「プライバシー」領域概念の構築に焦点をあてて分析した北原恵の研究が参照されるべきであろう。本書では長の研究は、「皇室研究へのジェンダー研究からのアプローチとして参考になる」（六頁）と

紹介されるにとどまる。しかし長と北原の研究は、「皇室と近代家族論の接合」を試みた研究でもあり、日付を特定できる新聞という史料の利点に着目し、歴史のいつの時点で出来事かを特定しつつ分析を進めている点で注目すべき内容を持つ。

長は、天皇・皇后イメージは、「常に受容され、媒介される回路を通じて攪乱され」、「モデル」像の受容者の広がりには、「モデル」像の側にも変化を求めたという皇室と社会の側との相互関係に留意し、「一夫一婦」は再生産戦略としての結婚・家族規範であることに注目する。長によれば、明治期の天皇家の子どもたちはすべて庶子であり、生母から引き離す「御乳人」が存在するなど、近代家族規範からは「齟齬をきたす存在」であった。それに対し、婚姻内での次世代再生産を求められた皇太子夫妻の結婚は「一夫一婦」のモデルとされ、また現実にも皇位継承権を持つ男子皇孫が相次いで誕生したことで、情愛を帯びた「家族」像の提示が可能となったという。そのことで初めて、次世代の「再生産」機能も備えたモデルとして、明治期天皇の「家家族」と皇太子夫妻の「家庭家族」からなる天皇一家の家族像が、新聞付録として、日露戦争のさなかに登場する。長の研究は、近代日本の家族は「家家族」と「家庭家族」の二つのモデルの相互補完からなるとする西川祐子の近代家族論の定義を歴史学の立場から裏付けるものでもあった。

他方、北原は、美智子妃の結婚が、新聞記事には、民間からの皇太子妃選び、乳人の廃止と母乳育児、家族同居など戦後の「改革／英断」として取り上げられてきたことへの疑義を呈する。実は、戦前の新聞にも、良子皇后の母乳育児が、公式発表として正

月、紀元節といった国家の節目ごとに「母性愛の模範」として流され、しかも良子皇后授乳言説の増加は、皇室の一家像が正月新聞に登場する時期と一致しているという。また乳人選定や発表を通じ母の身体を天皇制の元に秩序付け規範化した戦前の乳人制度は、戦後には、「戦前の非人間的な天皇制の象徴」とされ、美智子妃の場合には、「乳人の廃止」と「母乳育児」をセットにして育児責任を一身に担う母親像がアピールされたと指摘する。

しかし、本書では、マスメディアが、母乳育児と乳人制度の廃止をセットにして「改革」として取り上げたことには触れず、乳人の廃止は、「もはや明仁・美智子のカップルでなかったとしても時代の流れ」（一七三頁）と述べるにとどまる。北原の研究に学ばなら、戦前の良子皇后の母乳授乳を「なぜか隠し」「乳人の廃止」と「母乳育児」をセットにしたメディアでの報道は、巧妙な言説操作と言える。皇室と近代家族の接合、戦前と戦後の連続と断絶という本書の課題からすると、長、北原の研究とその分析方法を著者はどう受け止めるのだろうか。

以上、皇室と近代家族の関係を探る研究にも学びつつ疑問点を述べたが、書評を書きつつ何度も私が評者にふさわしいか自問した。それは門外漢だからというだけでなく、現在を生きる自分が過去の史料を読み解く困難を自覚しつつ、どう史料を読み解いていったら良いのか、私自身が模索し悩み格闘していることによる。しかし最後まで、本書で多用されるマスメディアに関する資料も含めた史料批判や史料読解をめぐる著者の模索や試行錯誤、格闘の過程といった深いレベルまで読み取れないままに終わった。その意味では不十分な書評である。が、そうであったとしても、こ

の書評が、何らかの議論につながればと思いつつ書評を終えたい。

① 原武史『平成の終焉——退位と天皇・皇后——岩波新書 二〇一九年。多木浩二『天皇の肖像』岩波新書、一九八八年。

② 沢山美果子『「家庭」という生活世界』大門正克・安田常雄・天野正子編『近代社会を生きる』吉川弘文館、二〇〇三年、『近代家族』における男——夫として・父として——阿部恒久・大日向純夫・天野正子編『男性史二 モダンニズムから総力戦へ』日本経済評論社、二〇〇六年。沢山美果子『近代家族と子育て』吉川弘文館、二〇一三年所収。

③ 藤野裕子『書評 大門正克ほか編『近代社会を生きる』』『歴史評論』六七五号、二〇〇六年。

④ 長志珠絵『家族イメージの形成と天皇・皇室』、北原恵「皇室の生産・生殖をめぐる表象分析」、三成美保他編『国民国家と家族・個人』所収、二〇〇五年、早稲田大学出版部。

⑤ 西川祐子『近代国家と家族モデル』吉川弘文館、二〇〇一年。

⑥ (A5判 三九〇頁 二〇二〇年一月三日 吉川弘文館 税別九〇〇〇円)

(岡山大学大学院客員研究員)